

11～13 世紀の東アラブ諸都市における「説教」と「説教師」： バグダード、ダマスカス、カイロを比較して	
村山 さえ子	比較社会文化学専攻
期間	2006 年 8 月 23 日～2006 年 9 月 13 日
場所	シリア・アラブ共和国 ダマスカス
施設	国立アサド図書館（写本部門および図書部門）、 フランス・アラブ学研究所（図書館）、ウマイヤ・モスク、 ザーヒリーヤ図書館（旧ザーヒリーヤ学院）、アーディリーヤ学院

## 内容報告

### 1. 海外調査の位置づけと必要性

調査内容について述べる前に、研究目的と現時点まで成果と学位論文の計画の概略について述べる。

報告者は東アラブ地域の諸都市に関して、特定のテーマや個別研究、政治史や社会民衆史としてではなく、多様な社会階層の関わりを含めた都市全体を総合的にかつ生き生きと捉えることを目指している。この際に権力者、有識者、民衆などが一同に会すこともある「説教」を手がかりとしている。

「説教」に相当するアラビア語の語彙の中では、フトバ、ワアズ、キッサ、タズキールなどがある。フトバは金曜日の正午の集団礼拝などで、礼拝に先立って行なわれた。その際にハティーブ（＝フトバを行う「説教師」）はまず神を讃え、預言者に神の祝福があらんことを求めることに加え、その時々支配者にも神の祝福を求めることがあった。フトバの中で名を読み上げられることは、すなわちその地域における支配者の支配を承認したことを意味した。このことから史料中のフトバに関する記述は「説教」の内容ではなく、誰の名がどの都市の会衆モスクで読み上げられたかに集中している。ワアズは定式化されたフトバとは異なり、支配者の御前から有識者の集会、市井の人々の集いなどさまざまな場所で行なわれた。話し手は、人々の心に神への畏れを喚起し、理想となるムスリムの姿を示すような教訓的、諫言的内容を、心の底から語ることが求められた。また、神を讃えることを主眼とする「説教」はタズキールといった。

これらアラビア語の語義の別なく分析概念として扱う場合、本報告中では「説教」、その行為者を「説教師」とする。しかし、報告者の意図はこれらアラビア語の語彙の意味範疇の相違を考慮せず扱うことではない。

むしろ逆である。

これまで「説教」に関する先行研究は、通史的に、また広域的に扱ってきた。「説教」はイスラーム勃興期には教義を浸透させる役割を負っていたが、ウラマー層の形成と教義の確立によりその役割を終え、時代が下るにつれて卑俗に流れていったとされてきた。また、「説教」に関する批判や擁護の書、説教集を取り上げ、「説教」とウラマーの宗教的権威について論じた研究もある。しかしながらこれらの先行研究はアラビア語の意味の差には配慮せずに「説教」を取り上げてきたため、「説教」の変化は、個々の「説教」の役割や性格によるものか、あるいは社会状況によって周囲の反応や対応の方が変わったのについては明らかにしてこなかった。報告者は「説教」それぞれの語彙の差、機能の違いを、時代・地域の背景も考慮した実証的な検討が必要であると考えた。

これらを踏まえ、修士論文において「説教」のうちワアズについて、時代・地域をアッバース朝後期、具体的にはセルジューク朝スルターン＝トゥグリル・バクがバグダードに入城した 1055 年から、1256 年にモンゴル軍により陥落するまでの約 200 年間に限定して取り上げた。既に触れたように、金曜礼拝時に行なわれるフトバは、主にその地域での統治者の支配を承認するか否かという点において歴史家は記述を残すものの、「説教」の内容や話し手、聴衆との関係は見えてこない。また、キッサやタズキールに関しては史料中に現れる情報が少なく、検討対象とはしがたい。当該時代のバグダードにおいてワーイズ（＝ワアズを行う「説教師」）として活躍したウラマー、イブン・アルジャウズィーが『歴史の秩序』と題する大部の年代記を著しており、ワアズに関しては豊富かつ精彩あふれる情報



ら13世紀にかけてのバグダードでカリフ＝ナーシル治世中に司書としても活躍した歴史家イブン・サーイー著『歴史と珠玉の伝記集成抄本』を複写する予定でいた。ところが1950年以前の出版物は書籍の保護のためにコピーは禁止されていた。同書は1934年バグダードで出版されたものであり、コピー禁止の対象であるため断念せざるを得なかった。しかし、デジタルカメラによる撮影は認められたため、同書およびバグダードのモスクに関する研究書『バグダードの諸モスクの歴史と遺構』（アールシー著、バグダード、1927）の撮影をした。また、先の述べたイブン・アルジャズイー著『諸師集』（チュニス、1977）と『東アラブにおける諸ニザーミーヤ学院の有識者たち』（ナージー・マアルーフ著、バグダード、1973）については一部をコピー、一部を撮影した。

アサド図書館、仏研での調査の後、主に日没後に街の書店、古書店にも足を運んだ。夏季、現地の一般の商店などは日没後に営業を再開するからである。書店めぐりは日本では入手困難な最新の研究書から古書まで自分の目で確かめることができる貴重な機会でもある。特に、バグダードで出版された書籍を複数扱う書店には複数回にわたって足を運んだ。店主、店員に研究テーマや探している本のタイトルについて話すと、彼らはそれに応じて報告者未見の書籍を紹介してくれることもあった。街の書店は第3の図書館で、店主は司書といっても良いほどである。この書店では1959年にバグダードで初版が発行された研究書『ムスタンシリーヤ学院の歴史』の第3版（ナージー・マアルーフ著、バグダード、1976）、『アッバース朝期のバグダードの諸学院』（ラウフ著、バグダード、1966）ほか、図書館でしか閲覧できないと思われていた希少書籍を数点入手することができた。

最後にウマイヤ・モスクおよび3ヶ所のマドラサについて実地検分した。ウマイヤ・モスクは観光用にも開放されているが、現在でも金曜正午の集団礼拝を行なう会衆モスクであり、ムスリムにとっては巡礼地のひとつでもある。報告者が訪れたときも国内外からの巡礼者を多数見受けた。また、ザーヒリーヤ図書館（旧学院）は、かつては多数の写本を所蔵する図書館であったが、現在は全ての写本をアサド図書館で一括して管理・所蔵している。ザーヒリーヤ図書館および向かいにあるアーディリーヤ学院は改装中で一般開放はしていないということであったが、管理人の好意で内部を見学させていただいた。ごく短時間ではあったが、先行研究の見取り図などでは解らない、イーワーンの広さなどを確認できた。しかしながら、報告者は猛暑

のために数日体調を崩してしまい、今回は実地検分には十分な時間をあてることはできなかったことが悔やまれる。

### 3. 調査の成果

本調査によって①修士論文執筆時点では検討できなかったバグダードの地理的背景、特にモスクやマドラサの位置や社会的背景について検討するに足る情報を収集することができた。②13世紀および今後、検討対象とするダマスカスに関して豊富な情報を含む史料を入手した。③カイロにあるアラブ連盟大学写本研究所とは異なり、アサド図書館で写本の複写を取るに必要な手順は明確でなかったが、今回はそれを確認することができた。今後、研究を進めていくにしたがって、必要な史料も増えることが予想されるが、今後必要な史料が同図書館の写本部門に所蔵されている場合でも、多少の制限はあるが利用する際には滞りなく調査、複写ができる。

現在では世界中からインターネットで情報の収集ができるかのように思われるが、そうではない領域もあることを実感した。直接に足を運び、人と人が対峙することによってのみ成り立つ関係が、今回の調査の成果につながったことを強調しておきたい。

現在は収集した史料を鋭意読解し、研究書を参照しつつ検討を進めている。

### 4. 今後の展望

当面の課題としては、今回の調査で得た情報によって、「説教」とマドラサの関係を軸に、修士論文では不十分であったマドラサの社会的機能や権力者による統制について補足しつつ、バグダードとダマスカスの比較検討を行なう。11～13世紀における各地でのマドラサの増加はウラマーの定職化や育成の制度化にもつながったと言われる。また、先行研究を参照すると、「説教師」への批判の書が多数著された時期と重なる部分がある。両者の間には関係があるか否かは検討に値する。もう一点マドラサとの関連で言えば、バグダードではワアズはニザーミーヤ学院などで数多く行われたが、本調査で得た情報からは、ダマスカスではマドラサでワアズが行われたという事例は稀である。この差は、マドラサの機能の変化によるものか、地域の固有の事情によるものか、あるいは「説教」の性格、または社会状況の変化によるものなのか、明らかにすべきであると考えられる。

なお、既に本調査の成果に基づいて検討を進めた結果を「アッバース朝後期バグダードにおけるワアズの

統制」として、2006年12月10日に九州史学会イスラム文明部会において口頭発表した。今後はこの報告を踏まえて学会誌へ投稿することを計画している。

最後に、この度の調査に関して2006年夏の特殊事情に触れておく。調査計画を立てた4月の時点で、期間は9月下旬から始まるラマダーン月(断食月)を避け、なおかつ報告者が調査に十分な時間を取ることができると8月下旬から9月上旬とした。ところが7月上旬、中東メディアでは第6次中東戦争と呼ぶ、“レバノン危機”が起こってしまった。レバノン国内からの避難民も使うベイルート・ダマスカス間の幹線道路や空港が空爆されるなど、予断を許さない状況であった。一時はシリアも攻撃の対象となるのではないかと危惧された

が、8月に入り事態の拡大・悪化は辛うじて止まった。報告者は計画通りにシリア入りしたものの、国内に避難民が押し寄せてきたためにホテルの確保が難しく、とあるムスリム一家のお宅にホームステイをさせていただくことにした。そのお宅にはレバノンから避難してきた家族がいた。彼らは、報告者が体調を崩して寝込んでいる間に帰国してしまった。お別れやお礼もまともに言えなかったことが悔やまれる。その家族がその後どのように過ごしているのかわかることはできず、ただ無事を祈るばかりである。“危機”によって報告者の当初の計画に若干の変更は生じたものの、調査のものに支障が出ることはなかった。しかし、“歴史的シリア”で起こっていることに今もなお無関心ではられない。

むらやま さえこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 比較社会文化学専攻  
saekomr1@george24.com

#### 【指導教員のコメント】

歴史研究にとって、「史料」は命綱といえる。どんなに斬新なテーマでも、どんなに研究の必要があろうと、史料がないことにはどうにもならない。イスラム史についていえば、歴史史料の総量は、他地域の歴史にくらべても多く、前近代については、叙述史料 Narrative source が豊富なことが特徴である。これらは、写本として流布していたわけだが、19世紀以来、研究者が校訂し印刷出版された刊本も多数あり、日本の研究機関にも主だったものは揃っている。学部の卒論や大学院の修士論文の段階では、これら刊本をつかって、日本にいても十分な研究ができる状況にある。しかし、刊本になっているものは、著名な著作ばかりで、さらに踏み込んだ研究、とくに従来は無視されていたような研究テーマに挑むときは、未刊行の手書きの写本にあたる必要がある。村山さんの研究テーマである「説教師」もこのような例である。調査報告では、シリア国立図書館で写本の閲覧・入手にいかにか苦労したかが述べられているが、シリア側からいえば、著名な写本がオスマン朝(現トルコ)や西欧諸国などに海外に流出したという苦い経験から防衛過剰になっているところがある。トルコの図書館も以前はガードが堅かったが、近年は閲覧許可も得やすくなり、デジタル画像で写本が閲覧でき、CD-Romで写しが入手できるようになっている。これはEC加盟問題があつてのことともいうが、いずれにせよ、写本をどうやって閲覧するかという経験は研究の出発点ともいえる。

(文教育学部 教授 三浦 徹)